

「動詞活用の定着を目的とした
効果的な方法の試みと実践
～動詞変化形提示ツールを使用した試みを中心に
ーフランス語とイタリア語の場合～」
**Pratiques de méthodes efficaces
pour la fixation des conjugaisons verbales**

黒田 恵梨子, **KURODA Eriko**, Université des études étrangères de Kyoto
川口 陽子, **KAWAGUCHI Yoko**, Université de Kobe
堂浦 律子, **DOURA Ritsuko**, Université des études étrangères de Kyoto
井上 昭彦, **INOUE Akihiko**, Université des études étrangères de Kyoto
神谷 健一, **KAMIYA Kenichi**, Institut de technologie d'Osaka

1. はじめに (神谷)

本研究は7言語11名の外国語教員が関与する共同研究プロジェクトの一環であり、平成24～26年度科学研究費補助金基盤研究(C)『データベースソフトを活用した初習外国語授業における教材提示の円滑化と授業の活性化』(課題番号24520675)の助成を受けている。

近年、外国語授業の現場でもコンピュータ環境を利用した授業設計が広く取り入れられるようになった。しかし現実にはどの教育機関においても設備の設置状況は決して満足できる状況になく、依然として大多数の外国語授業は従来型の普通教室で行われている。この改善に向け、本研究ではプロジェクタを利用し、語形変化・例文提示・単語提示・四択問題などのデータの多目的利用を念頭に、データベースソフトウェアを利用したスライド教材提示ツールの開発と授業実践を行っている。

一般にスライド教材とはPowerPoint教材をさす場合が多いが、初習外国語教育で利用される基本的な語形変化や例文等を提示するには大量のスライド枚数が必要であり、利用するスライドの抽出や提示順変更などで不自由に感じることが多い。一方、データベースソフトではデータとレイアウトを別々に管理でき、プログラム制御により部分的な表示・非表示の切り替えなど柔軟な提示が可能であるため、集中的な繰り返しが必要な内容を指導する際には特に有効性が高いと考える。

本稿で紹介する動詞変化形提示ツールは所定のExcelファイルに入力した動詞リストを利用する。ツール上では一覧から任意の動詞のみを抽出できるため、授業の目的に合わせて使いたいものだけを選ぶことができる。スライド表示中の画面ではボタン操作により人称変化形の部分的な表示・非表示や、表示された主語に対応する変化形の表示・非表示を行うことができる。これは従来型の教科書や黒板を利用した授業では実現困難な活動である。

2. フランス語動詞変化形提示ツール紹介と使用例 – 黒板との比較を通して (黒田)

ここでは、フランス語動詞変化形提示ツールの紹介とその使用例、特に従来の黒板学習との違いについて述べてみたい。フランス語動詞変化形提示ツールは、前述のようにメイン画面の動詞一覧から任意の動詞を抽出し、その活用表を下記の図1のように表示することができる。従来の黒板学習ではその場で全て板書しなければならなかったが、このツールを使用することで大幅な時間短縮と、見た目のわかりやすさの両方を実現することが可能である。さらにツールでは、左下のボタンを操作して (図3)、人称を選んで活用表の一部を隠したり、「ランダム7」(r_7) という機能でアランダムに活用表の一箇所を隠したりすることができる。また「一行練習」という機能を使って、特定の人称のみ取り出すことも可能である。(図2)

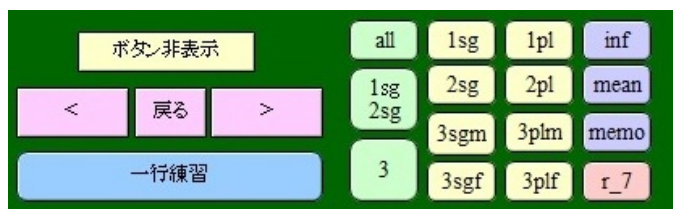


(図1)



(図2)

実際の授業では、筆者は主に復習の場面でツールを使用し、その前の時間に学習した内容を学生に思い出させ、より定着を図るための一助としている。具体的には、「ツールで活用表を提示」→「教師が発音」→「ク



(図3)

ラス全体でリピート」という流れであり、これだけでは従来の黒板学習と大差はないが、ツールを使うと次々と動詞を入れ替えたり、あるいは否定形に切り替えたりできるので、復習をスムーズにリズムカルに行なうことが可能である。

さらに、ツールの機能を駆使して、応用的な練習をすることもできる。筆者は授業中、時間がある場合は、学生を指名して活用表を読ませたり、活用の一部または全部を消して、該当箇所を発音させるなどしている。さらに、「ランダム7」を使えば、ゲーム感覚も増し、学生もより集中して復習に取り組むことができ、学習内容も学生の記憶により定着するように思われる。

ツールは学生にも概ね好評で、従来の黒板学習と比較しての感想を聞いてみたところ、「わかりやすい」「時間短縮になる」「文字や画面の切り替えができるのがいい」「先生の発音が頭に残る」などのコメントがあった。ツールの画面は黒板よりも視線を集中させやすいためか、学生も一定の学習効果を感じてくれているようである。ただし一部の学生からは、「PC 接続に時間がかかる」「書き込みができない」

「遠くからだと見づらい」「眠くなる」などの意見もあり、このあたりは授業の運営や段取りをもっと洗練させる必要性を感じている。今後もさらに工夫を重ね、学習場面における、より効果的なツールの使用方法を考えていきたい。

3. フランス語の授業における動詞変化形提示ツールの効果と課題（川口）

以下では、2012年度後期に実施した動詞変化形提示ツール（以下ツール）を用いた動詞活用定着のための練習方法とそれに関するアンケート結果（4大学5種類6クラスで実施）について報告する。この練習の目的は「動詞を使えるようになるために、まず活用を覚える」ことであり、動詞の活用を「読める」「言える」「書ける」ようになることを目標としている。

まず練習方法であるが、次の2種類を実践した。[1]「未習動詞または未習時制の導入時」：語幹と語尾について黒板を用いて説明した後、ツールを用いて動詞の活用を「読める」（活用表）→「言える」（活用表の項目を消していく、ランダム7、一行練習）の練習を行い、直後に活用表を見ずにどのくらい「書ける」かの確認も行った。[2]「既習動詞の既習時制の復習時」：「言える」「言えない」場合は「読める」（活用表）→「書ける」（活用表、一行練習）の順に、学生はセルフチェックを行った。なお、クラスの状況に合わせてあらかじめ動詞・時制を選択し、それらを複数回の授業において練習し、学生は学期初めと学期末での自己の理解度を比較した。さらに、学期末に「書ける」の復習テストを実施したクラスもある。そのテストの目標は「以前よりも書ける」動詞の活用を増やすことである。

アンケートは学期内に2～3回実施し、「読める」「言える」「書ける」に関する理解度のセルフチェック（2～3段階）、及びそれぞれの「効果的な学習方法」と「ツールの感想」（ともに記述式）を答えさせた。その結果から以下の2点が明らかとなった。[1]ツールを用いた練習は「読める」「言える」ようになるには効果的である：「読める」「言える」の項目での効果的な方法として、ツールを挙げている学生数が過半数を占めるクラスが複数あった。また、ツールについて指摘した学生数が半分以下のクラスにおいても、他の回答と比較すればその回答数は上位に位置する。さらに、ツールの感想でも好意的な回答が多くみられた。[2]ツールを用いた練習は「書ける」ようになるには効果が小さい：「書ける」の項目で効果的な方法としてツールを挙げた学生は非常に少ない。その原因としては、ツールの画面上では活用の規則性を視覚的に提示できなかった、綴り字と発音の関係の理解が不十分だったという2点が推測される。一方、「書ける」ために効果的な方法としては「ひたすら／とにかく書く」「筆記の小テスト」が目立った。このことから、綴り字と発音の関係の理解を深めるなど、音と文字を関係付ける練習を取り入れることにより、「読める」「書ける」動詞活用を増やすことができるのではないかと考える。

その他の課題としては、ツールの使用中、退屈している学生がいたことが挙げられる。彼らの存在をなくすためには、動詞・時制を厳選し、適切な時間配分を心掛けるとともに、活用を覚えることは動詞を使えるようになるために必要なステップであるという位置づけを一層明確にする、他の学生が答えている時間は待ち時間ではなくセルフチェックの時間であることを徹底させる、そして実際に動詞を授業内で使えるよう授業を組み立てることが重要である。

色の効果的な使用をはじめ、ツール自体にも改良すべき点はある。今後は、ツール本体の改良とツールの使用法の改善の両面から、動詞活用定着のより効果的な方法をさらに追及していきたい。

4. イタリア語動詞変化形提示ツールについて（堂浦・井上）

続いて、イタリア語動詞変化形提示ツールについて考察する。イタリア語もフランス語と同様に主語によって動詞が変化する。その変化のしくみを学び、活用形を覚えて使いこなせることは、イタリア語においてもきわめて重要である。このイタリア語ツールは、フランス語と同じ目的で同じシステムによって開発されているが、言語的違いに基く違いを意図的に設けている。

イタリア語は、動詞の活用形が主語人称代名詞を伴わずに使われることが多い。とくに一人称と二人称は、単数複数ともに、強調する場合などの例外を除き原則として省略される。そこで、フランス語ツールにはない機能として、イタリア語ツールには「活用表」のスライド画面に「代名詞の切替」を設けた(図4)。これによって主語人称代名詞を「表示なし」「イタリア語」「日本語」にすることができ、主語と活用形を意識のなかで強く結びつけ、主語が伴わない活用形にも慣れて使いこなすための練習を行うことが可能である。同様に、「一行表示」のスライド画面においても、「代名詞の切替」でイタリア語と日本語の主語の表示が選択できる。主語が日本語で表示されている場合も、対応した活用形をすばやく記憶から引き出して答えられるような練習を意図したものである。



(図4)

このツールは、動詞の活用形を確実に記憶するための補助教材として、あるいは復習のための教材として有効に利用できる。だが、系統的な動詞活用の学習のために、まず最初は板書での説明によって、徹底して「語尾変化」の概念を習得するのが望ましいと考える。フランス語と異なり、イタリア語は、表記された文字はごくわずかな例外を除いてすべて音声化されるので、板書の文字を見ながら何度も語尾と活用形を繰り返し発音して覚えるのが効果的であろう。たとえば、**parlare** (話す) の場合、**are** の前に長い縦線を引く。語幹と語尾を分けることを徹底して認識させ、語尾の変わり方を覚えればよいと説明する。「**io** (私) の時は**-o**」「**tu** (君) の時は**-i**」というふうに、説明しながら板書する。その後、語尾のみ「**-o, -i, -a, -iamo, -ate, -ano**」と繰り返し全員で発音する。続いて語幹をそのまま写し、「**parl**」と「**o**」をまとめて囲んで、これが **parlare** の **io** が主語の形「**parlo**」だと示す。そして、活用形を一つずつ、あるいは三つや六つまとめて何度も発音して記憶する。

注意すべきは、初めてイタリア語の動詞に触れるという段階で、「語尾変化」の認識がないままツール練習を始めると、系統的な記憶がかえって難しくなることである。それゆえ、前段階としての「語尾変化」の理解が非常に重要なのである。

さて、前述のように、動詞変化形提示ツールは Excel でデータを作成できるため、自由に動詞を選択することができる。次に、その際の語彙選択について、ツール使用に対する学習者の反応を軸として考察したいと思う。

イタリア語では、フランス語に比べると「発音ができればスペルも書ける」というケースが多いが、それでも、ツールを利用するイタリア語授業の現場から「発音とスペル」の関係を見た場合、留意する点がいくつかある。

例えば **amare** は、いわゆる伝統的なイタリア語教科書において範例として用いられてきた動詞であるが、このイタリア語の動詞はフランス語の **aimer** と異なり、人を対象とする用法がほとんどで、実はイタリア語の動詞の中でもそれほど使用頻度が高いものではない。にもかかわらず、それが範例に好適であるとみなされてきたのは、それがほぼローマ字読みと同じ発音を持っていたからであり、そのため学習者が容易に発音し記憶することができると考えられてきたからである。

けれども、実際のイタリア語授業において、*amare* のように容易に読むことができる（そしてまた書くことができる）動詞の口頭練習を行う場合、動詞変化形提示ツールを用いるメリットは実はあまりない。ツールが効果的なのはローマ字読みができない語彙の反復練習の段階である。当然のことながら、ツールを利用した練習では、投映された画面にフリガナをつけることができず、学習者はスクリーンに提示された活用形を見ながらイタリア語の正しい発音で読み、またその音を記憶するよう促される。イタリア語の綴りとその発音を直接的に結び付けるこうしたツールの機能は、学習者が「読むことができる」動詞語彙を徐々に増やし、それに伴ってイタリア語で「書くことができる」語彙の数を増やしていく。

動詞変化形提示ツールがさらに効果的であるように思われるのは、ツールに組み込まれた一行表示機能が、活用形の音の記憶を補強あるいは断ち切る働きを持つ場合である。例えば、一行表示機能である一つの主語が提示されると、初習クラスの学生は、自分の頭の中で活用形の音のまとまりを再生し、それを補強する。一方、学習者が習熟者である場合、一行表示機能の使用は、音の流れの記憶を断ち切り、条件反射的にただ一つの活用形を発音させる、会話のよい予備練習となる。

一般に、イタリア語の動詞の定着率を見ると、学習者がローマ字読みに倣って発音できると感じるか、感じないかという点で差が生じている。これはいわば、発音の容易な *amare* の口頭練習から入ってしまう方法の欠点であると言えることができるかもしれない。大半の語彙がローマ字読みに倣って発音できるイタリア語だからこそ、イタリア語独自の読み方を持つ語彙の習得にはことさら留意しなくてはならないのであり、ツールの導入はその効果的な手段の一つであるように思われる。

5. 今後の展望（神谷）

このようなツール利用型授業を広めて行くには操作性の改善と操作マニュアルの整備が必要であろう。またこのような多機能なスライド提示ツールの利用による教育効果の検証、ツールの有効性が高まる利用方法の分析、授業展開の詳細な記述が必要である。本稿では動詞変化形提示ツールのみを紹介したが、本研究プロジェクトでは例文や四択問題の提示ツールの実践・検証も行っている。今後、フランス語やイタリア語でもこれらの研究を進めて行くとともに、従来型の黒板+チョークでは実現しにくい指導手法を効率化できる新しいツール開発も進めて行きたい。

*フランス語およびイタリア語動詞変化形提示ツールのダウンロードサイト

<http://www.oit.ac.jp/ip/~kamiya/fra/>

ツールの使い方等についての問い合わせ先：神谷 健一, kamiya@ip.oit.ac.jp

*主な参考文献

神谷健一・三浦由香利・高木美菜子・田原憲和・池谷尚美・柿原武史・川口陽子・黒田恵梨子・堂浦律子・井上昭彦・金善美(2012)「データベースソフトウェアの活用—外国語授業における教材提示の円滑化と授業の活性化に向けて—」『第37回教育システム情報学会全国大会講演論文集』,

<http://www.jsise.org/taikai/2012/program/contents/pdf/E4-3.pdf>

高木美菜子・三浦由香利・神谷健一(2011)「データベースソフトウェアを利用した教材作成支援ツールの開発とロシア語教育における多面的利用の可能性」『ロシア語教育研究』第2号, ISSN 2185-2979, pp.25-36, 日本ロシア語教育研究会,
<http://rokyoken.web.fc2.com/shiryu/kaishi2011.pdf>